

(2) [実践事例2]

Lesson 4 Speech -A Man's Life in Bhutan (TOTAL ENGLISH 3) における授業改善の視点

学校教育における英語リーディング指導の課題の1つに、教科書本文の内容をどのように生徒に深く理解させ、本文内容をもとにどのように生徒の意見や考えを英語で表現させるかということが挙げられます。その課題を克服するために、読解指導において教師が発問を効果的に活用することが指導方策の1つと考えます。読解発問は、事実発問、推論発問、評価発問の3つのタイプに分けられます。

- ・ 事実発問・・・本文上に直接書かれた情報を読み取らせる発問。
- ・ 推論発問・・・本文上には直接示されていない内容を本文情報と読者の背景知識から推測させる発問。
- ・ 評価発問・・・本文情報に対する読み手の考えや態度を表明させる発問。

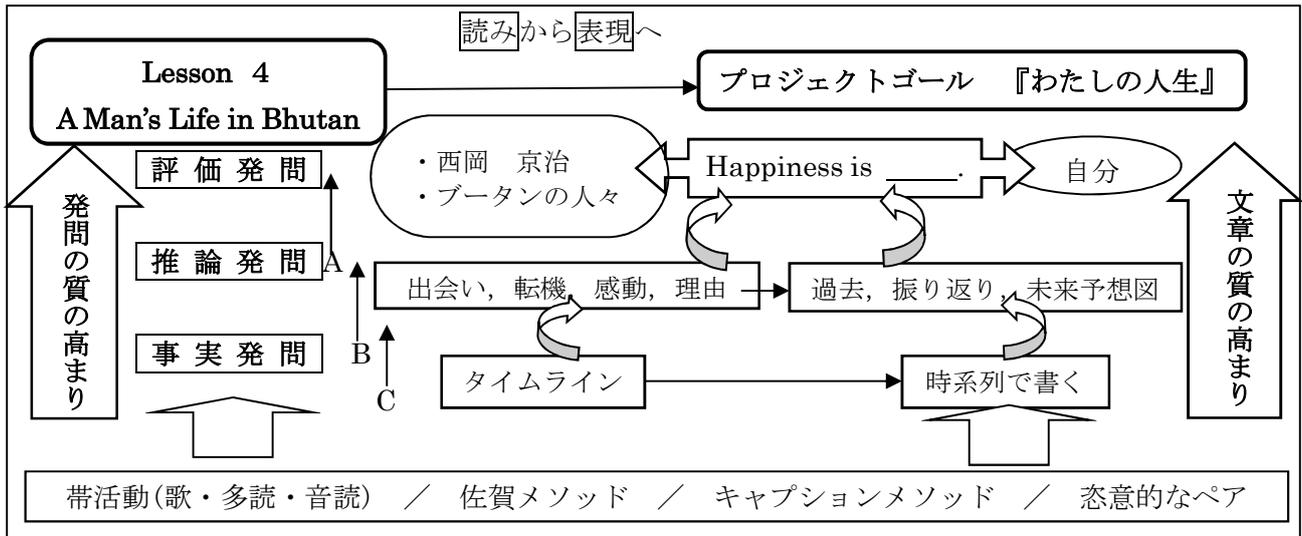
これらの発問の中でも、特に推論発問及び評価発問には、生徒から異なる解釈や考え方を引き出す特徴があることから、本文情報を読む生徒の動機を高める、生徒の読みを深く豊かにする、生徒同士の協働学習を促すなどといった、読解指導における様々な可能性があると考えられます。

① 発問構成発問を軸とした単元構成

Lesson 4 における発問を以下のように設定します。

Pre-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ Teacher Talkや写真などで興味をもたせ、本文の内容をつかみやすくさせる。 ・ 生徒とのInteractionの中で西岡京治に関するキーワードや写真の質問に答えさせ、情報を整理させる。
While-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒とのInteractionの中で本文に関する質問に答えさせたり、タイムラインに情報を整理させたりする【事実発問】。 ・ 本文を根拠に西岡京治がブータンに行く前に日本でしていた仕事を推測させたり、ブータンでの写真を時系列に並べさせたりする【推論発問】。 ・ ブータン人の立場で「西岡京治についてどう思うか？」などの質問に答えさせる【推論発問】。
Post-reading	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブータンに関する動画を視聴し、「あなたにとって幸せとは？」という質問に5文以上の英文で答えさせる。本文を基に自分の考えを表現させ、深い思考や豊かな表現を引き出させる【評価発問】。

② 発問とプロジェクトゴールとの相関関係



※キャプションメソッドとは、齋藤榮二氏の理論に基づき、授業者が用いた指導法です。

③ Lesson 4 での発問の高まり

While-reading（単元計画5時）の中の事実発問（タイムライン）から推論発問（日本での仕事・写真の並べ替え・ブータン人の気持ちの推測）へと、さらにそれらをPost-reading（単元計画7時）の中の評価発問（「あなたにとって幸せとは？」に答える）まで高めていきます。

④ Lesson 4とプロジェクトゴール『わたしの人生』のつながり

ア Lesson 4のリーディング活動で本文に出てくる年号や出来事を押さえ、タイムラインにまとめることにより、プロジェクトゴールで自身の人生に関して、時系列に分かりやすくまとめることができるようになります。

イ 推論発問に対する答えを西岡京治に関する出来事やブータンの人々の気持ちの変化を根拠に推測することで、プロジェクトゴールで自身の人生に関して、過去やこれからの将来についてより具体的に記述できるようになります。

ウ 本文のまとめとして「あなたにとって幸せとは？」という質問に答えることにより、プロジェクトゴールで自身の人生に関して、単に時系列で書くだけでなく、自身の人生観などより深い内容を書くことができるようになります。

⑤ 普段の授業を支えるものとして

これら③④のような活動を支えるものとして、普段の授業で取り入れている帯活動や佐賀メソッド、さらに2学期から実施している恣意的なペアによる教え合いがあります。帯活動では、毎時間歌を歌うことによって、英語独特の表現を授業以外でも口ずさみ、いつでも楽しく英語に触れる機会を増やしています。また、多読、音読を行うことで、まとまった英語を読む機会を増やし、読むこと自体に慣れさせています。表現力の育成に関しては、本県で取り組まれている佐賀メソッドを定期的に行うことで英語を使うことの楽しさを味わいながら表現力を磨いています。また、本学級は、学び合いの充実を図るために、アンケート、課題試験や実力試験の結果をもとに2学期当初より恣意的な座席で授業を行っています。前後左右ともに英語が得意な生徒と苦手な生徒の組み合わせになっており、英語が苦手な生徒に教えることで考えや知識を整理したり、英語が得意な生徒に教えてもらうことで苦手を克服したりするねらいがあります。